

A 島小中学校におけるレジリエンス教育

Education of Resilience in A Island Elementary and junior high School

井上 豊久

Toyohisa INOUE

(要旨)

本論は小中学校におけるレジリエンス教育のあり方を被災から復元した A 島小中学校を事例として検討したものである。以下の3つの点がレジリエンス向上には重要であることを明確にした。まず1つはコミュニティレジリエンスの継続的醸成と学校教育との関連づけである。学校は地域・社会において単独に存在するものではなく、地域の歴史や文化、そして過去からのコミュニティレジリエンスの状況を踏まえた上で教育計画を作成し、評価していく必要があるということである。2つめはパートナーシップの視点からの協働したレジリエンス教育である。開かれた対等な関係の中で家庭や地域、そして専門機関等とつながってこそレジリエンス教育の実践力強化が図られる。最後はアクティブラーニングの活動とのすりあわせである。効果的なレジリエンス教育を行うには主体的対話的で深い学びが不可欠であり、子どもの参画を直接体験や他人との関わりを通じて発達や段階に合わせて教育計画していく必要がある。

キーワード：自助、レジリエンス、アクティブラーニング、パートナーシップ、コミュニティ

1. はじめに

東日本大震災の発生から8年の歳月が経過したが、被災地全体としてみれば復興の遅れが指摘されている。そうした中、14年前の2005年3月20日に発生した福岡県西方沖地震において、被害が集中した福岡市A島はすべての住戸が半壊以上の被害を受けたにもかかわらず、死亡者ゼロ、迅速な全島民避難、そして地域、学校、住居等の復元を達成している¹⁾。高橋和雄は5回にわたる継続的なアンケート調査を行い震災復興からの学びを示している²⁾が、子どもたちの様子についての島民に対するアンケート結果として「A島への関心が強くなった」が51.6%と最高の割合であることを示している。また、家族関係の変化では1位は「家族の間での将来に関する会話が増えた」52.1%であり、4位「みんなで力を合わせるようになった」28.1%とともに家族での対話や支えあいが生じていることがうかがわれる。

A島は一般的には社会的・心的復元、学校教育での復元力（レジリエンス）ではなく、まちづくりや居住施設などハード面において東日本大震災での長期復興と比較し3年で復興（福岡市政だより2008年3月15日号）したことでレジリエンスモデルといわれている。しかし、子どものよりよい成長・発達という視点からのレジリエンスは学校教育において、震災の可能性大といわれる現状の中、今後も重要である。

福岡市が示した写真1と写真2をみると震災直後の厳しい状況から復元された一戸建て住宅や公営住宅の整備が一目瞭然であり、復興直後、ブルーシートで簡易に覆われていた家々が3年で整然とした居住区に変わっているのがみてとれる。道路の整備や避難場所の構築に加え、中学校が耐震的な問題が生じ、小中学校も一体化されたものとして右奥の高台に再構築されている



写真1 ブルーシートで覆われた復興前（震災直後）のA島

レジリエンスの概念については様々な議論があり、定まった定義がないとされ、多様な研究がなされている³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。レジリエンス研究の学校教育への応用も災害や戦争など未曾有の事態に揺らぎながらも、協力し対応しながら自分自身を回復・再生させいく過程でしなやかに変化し、経験していくものとして曖昧模範な形で存在する。中でも学校教育におけるレジリエンス教育に関しては原美香「学校教育におけるレジリエンス育成」⁸⁾に

概要が示され

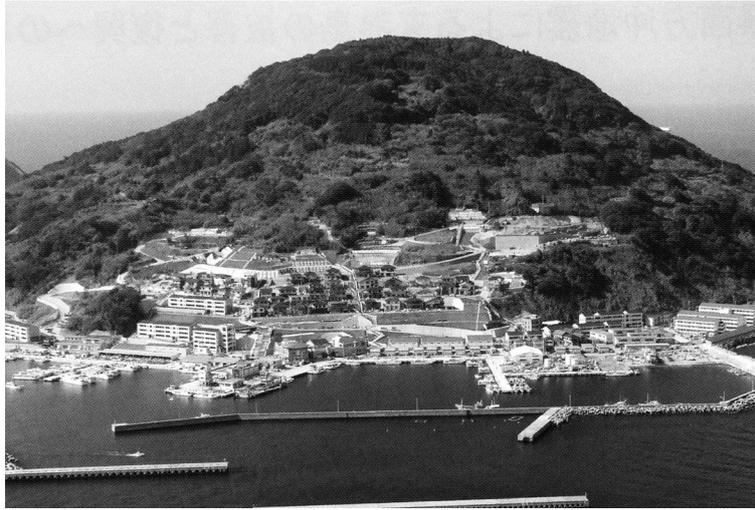


写真2 被災後・復興建築・整備されたA島

ており、その中で世界的には子どもに関するレジリエンス研究は1970年代から欧米でのリスクの高い子どもの中で「良好な適応をしている子どもたち」（原美香2013p1）への注目指摘から、そして「2011年の東日本大震災以降ますます注目」（原美香2013p1）されているという。これまで学校教育にも関連づけられる研究は心理学的なレジリエンス尺度、特に個人内要因への研究が進められていると示されている。本論文ではレジリエンスに関して個人的要因だけではなく、コミュニティレジリエンスを含んだ社会的要因、そして、学習において獲得される獲得的な内容を生涯学習や教育的視点から学校教育実践を検証する。コミュニティレジリエンスはコミュニティ自身が持つコミュニティを復元していく力であり、A島でのレジリエンスは島しょにおけるコミュニティレジリエンスの独自性、復興の迅速性と確実性から知られていた。2012年、2013年と論者は気仙沼市津谷大沢地区の聞き取り調査において、その重要性を改めて知らされた。あまり、知られていないが、この地域は「民泊」といって被災後に体育館や仮設住宅ではなく、家屋損壊を免れた地域住民の各自宅で家族の2から3倍の地域の被災者を1か月から6か月に渡って受け入れ、生活を共にし、コミュニティ全体で支え合いコミュニティを復元させていった地域である。コミュニティレジリエンス研究は重要であるが、本論では学校を中心に検討し、今後の学校教育におけるレジリエンス教育に関して具体的事例をもとに文献研究及び参与観察・聞き取り調査結果をもとに考察する。本論でいうレジリエンスとは厳しい状況においても復元していく力のことであり、レジリエンス教育とはレジリエンスを醸成し高めていく教育である。ただし、教育対象は生得的レジリエンスではなく、獲得していくレジリエンスであり、獲得的していくプロセスを含む動的なものにとらえることとする。論者はA島における資料収集に加え、A島を11回訪問調査、校長、教頭、教員、児童・生徒及び島の中心的存在である漁業協会長に聞き取りを行い、防災キャンプでは児童への講話を論者が行うと共に、参与観察した。本研究は防災教育と関連づけたレジリエンス教育の典型事例研究の一つであるが、2011年の東日本大震災関係の学校を対象とした研究は多くみられるが、本論の対象は東日本大震災関係以外の学校におけるレジリエンス教育研究の1つである。

1. レジリエンスに関わる社会的状況

学校教育及び防災教育というだけではなく、子どもの環境、特に子どものレジリエンスや「生きる力」に関わる島のコミュニティ的要因について最初に検討する。

A島には「百合若」伝説が残っている。武将「百合若」は平安時代の四条左大臣公光の子と云われており、北九州地方に多くの話が伝わっている。震災後、福岡市中心部で復興を記念し博多の代表的祭り飾り山がこの「百合若」で作成され展示された。

島の伝説は、百合若が陰謀で島に置き去りにされ、「緑丸」という鷹を使って故郷の妻と連絡をとりながら生き延び、やがて妻の元に戻るという話である。島内には、緑丸を祀った「小鷹神社」をはじめ、百合若にまつわる名所がある。この小鷹神社の祭りは子どもたちに役割分担がなされ、島や地域への帰属意識や誇りをもたらしめていると思われる。

島は博多から18km北に位置し、古来から大陸との交通の要所として重要な役割を果たしてきた。文永9年(1272年)と弘安4年(1281年)には、大陸から蒙古軍が博多湾に攻め込んだ元寇が起こっている。島は航路の目印として通過点にあったため、二度にわたる大軍の襲来を受けた。(この時の復興については記録が残っていない)

戦国時代(1558年～1570年)には、長州野島の海賊が島を襲い、島民が宮浦(現在の糸島市)に避難し、40年間無人となる歴史的事件が起こっている⁹⁾。この戦乱によって全島避難・帰島した歴史的経験は、貝原益軒が編集した『筑前国続風土記』(1709)に記述されており、福岡県立図書館に竹田文庫として収蔵されている¹⁰⁾。このことは、全島避難・帰島の事例として、現在も島民に語り継がれており、「A島ものがたり」としてA小・中学校落成記念誌にも収録されている¹¹⁾。

野島の海賊による全島避難の歴史は先述した小鷹神社の沿革とも関連している。717年に創建された「小鷹大明神」は永禄年間(1558～1569年)には避難によって放棄された。慶長年間(1596～1614年)にA島に帰島する人が増加、1615年に「小鷹明神」を再建し、明治に入り村社に格上げされている¹²⁾。このように全島民が避難を余儀なくされたという苦難の歴史が社会的に島民やそこに住む子どもの結束力や協働性をさらに育んだと考えられる。歴史上の事項ではあるが、子どもも含めた島民全体で窮乏に堪えるという経験をしたことでもあり、このことは子どもの教育において有形無形の影響があったのではと考えられる。

村社となった小鷹神社の重要な年中行事である「神座」(全国的は「宮座」と称される)は、古来より、「八軒竈」と呼ばれる8戸が1年交代で「座元」を務めてきた。八軒竈の由来については、慶長年間にA島に再び入植した家々が「草分け」として、神座によってA島における特権的な地位を維持したことが推測されている¹³⁾。

江戸時代に入ると鎖国体制が布かれた。幕府はキリスト教の禁止に加え貿易地を平戸と長崎に限定し、外国貿易、特に南蛮船の往来を厳しく取り締まった。福岡藩においてもA島を含む玄界灘に浮かぶ5か所の島に厳重な巡視体制を組織し(遠見番所)、沿岸警備・防備を強化した。現在、島で一番高い山は遠見山と呼ばれている。このように危機意識が伝承され続けられたということも重要であろう。

幕末期になるとA島は政治犯の流刑地となり、明治4年(1871年)の廃藩置県まで続

いた。幕藩体制崩壊後、A島の流人は他の島へ移された。こういった島外の政策や人物とのやりとりも長い目で見ると島民やその子どもに対話力や適応力を育てたのではと思われる。

明治23年（1890年）の町村制実施により、A島村や小呂島村などは資力もなく独立も困難であったことから六村が合併し小田村となった。その後、明治29年（1899年）には北埼村と改称し、昭和36年（1961年）4月1日に施行された新市町村建設促進法に基づきA島は福岡市の区域に編入され、福岡市A島となった。

A島の人口・戸数については、明治時代初期には300人台、50～60戸台であったのが、戦後は1,000人台、180戸台となったことが報告されている¹⁴⁾。住民基本台帳登録人口によって、西方沖地震前後の人口構成の変化をみると、震災前の2000年には総人口が700人を超え、20歳代以下が一定程度いた（図2）のに対して2015年9月には700人を割り込み、20歳代以下が減少し、人口ピラミッドは不安定になりかけている（図3）。

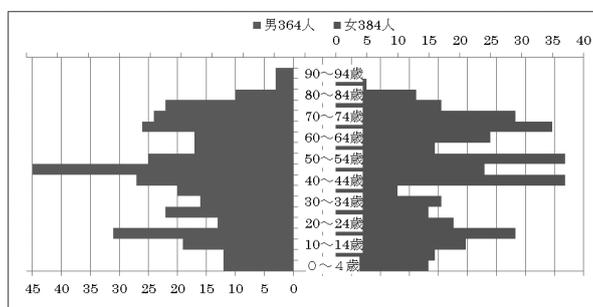


図2 A島の人口ピラミッド

—住民基本台帳、2000年9月—

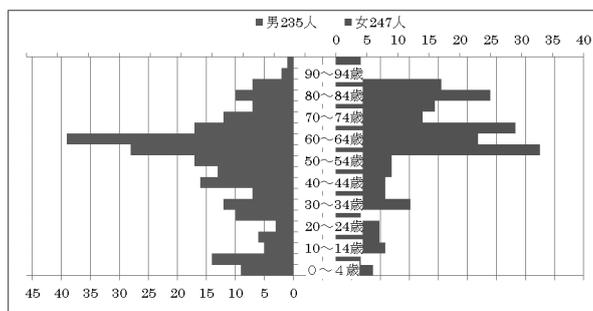


図3 A島の人口ピラミッド

—住民基本台帳、2015年9月—

全体的傾向としては、高齢化が進行し、子どもの数は減少の一途をたどっているが、若干出生も有り、少ない人数ではあるが子どもの育成はコミュニティレジリエンスの視点から今後も重要である。

全体的に資料、著作等が少なく、現在の段階では根拠が不十分なものも有るが、現段階での歴史、文化の視点からレジリエンス関係で簡潔に整理すると以下のようなだろう。

2. A島におけるレジリエンスに関わる歴史・文化的環境

子どもたちのレジリエンスに影響を与えた環境がいくつかあると思われるので整理して

示す。

(1) 古くからの連帯・自立精神の伝承

離島という地理的条件があっただけでなく、古くから A 島では大陸に近い玄界灘の過酷な環境の中、自分たちが環境を作り上げてきた意識が強いと思われ、その連帯・自立の精神が脈々と子どもたちにも伝えられてきていると思われる。

(2) 物語の共有

百合若伝説が島にはあるが、全国的にも百合若伝説はあり、この 8 世紀頃の事項は根拠不十分だが、地名には残っており、何らかの話のもとにはあったのではと思われるが、島の大切な信仰のひとつとなっており、百合若に関わる事項は島の行事の 1 つとして子どもも大人もかかわる連帯事業であり、子どもの社会性育成や自己統制力にも影響を与えたのではと考えられる。

(3) 無人島からの自主的な復元

戦国末期、安土桃山期に野島の海賊に襲われ対抗したが、再度の襲撃を恐れたため 40 年間無人島となっていた時期があった。この体験は大きいと考えられ、再度、帰島し、島を復元したという経験は、まさに島全体のレジリエンス経験が歴史的にあるという事であり、社会的強靱さが図られたといえよう。

(4) 島外人・流人との交流

江戸時代は黒田藩の海防の一翼を担い、山頂の遠見番所があり、防衛にあたっていた。流刑の地であり、流人に対しては寛容であったというのが一般的といくつかの文献で残されている。特に志士については讃えて碑を残している。このように島外の人と交流することによって島内だけの対応だけではなく、他者との協働の実践経験学習がみられたと思われる。柔軟な対応、現実的な対応力が大人たちに求められ、ひいては子どもたちにも感じられていたと推測される。

(5) 漁業による生業の工夫

明治期以降、小村、糸島郡に属していたが、昭和 36 年福岡市に合併、明治初年頃までは農業本位であったが、寺田源三郎により明治 35 年漁協設立、漸次、漁業発展、明治 43 年共同で防波堤等を竣工、市場がある博多に近いことは有利に働き、漁業が次第に発展していった。子どもの頃から手伝い、大半の子どもが中学校卒業後はすぐに大人の一員として役割と働きを持つこととなった。コミュニティレジリエンスの基礎はここから強化され、家を建てるときは全員が手伝うなど家屋が傾斜地にあることも有り、島全体での支え合いが子どもを含めて日常としてあった。

(6) 島民全体での節制経験

昭和 30 年代、生活が厳しく、島全体で菓子の禁止や酒類の飲酒制限を行う経験をする。この島民全体での危機管理実践体験は震災後の活動に影響があったのではと思われ、子どもに対しても嗜好品を我慢させる、子ども自身が我慢するという体験は震災後、困難な体験への自律性を醸成したのではと思われる。学校としても地域の一員として教育を行い、協働しており、一体であった。

(7) 島の行事での子どもによる役割分担と責任

漁は自然に左右されるという事もあり、小鷹神社等、迷信も含めて島民の多くに根強い信仰があったのではと思われる。個人の自宅に稲荷など取り込む個人生活に密着した信仰もあるのではと考えられる。震災後、自治会管理の小鷹神社再建には島民全体でかかわった。伝統的に子どもも含めた地域行事が行われ、子どもたちに連帯意識とともに役割遂行の意識を継続的に育んできたといえよう。学校も授業時間も含めて地域と地域行事を協働で工夫して児童生徒を参画させている。

3. 教育の歴史と背景とレジリエンス教育の概要

(1) 島民の中の偉人の出現と偉人学習

これまでのところ、特別な存在としては二人が記念碑にもなっており偉人として尊敬されている。その一人、松田可清（清三郎）は、江戸末期から寺子屋により識字活動を行っている。読み書きのできていなかった島民に対して粘り強い支援・指導を行い、18歳より40年間、島の人々の教育に携わっている。2人目はその弟子、寺田源三郎は教育、産業振興、生活改善に成果をあげる。兩人共に郷土愛が深く、人格が素晴らしかったとのことである。リーダーシップもあったようであり、島の発展への貢献大ではと思われ、こういった島民自身により教育の充実発展の過去があつてこそ、レジリエンスの基礎が培われたと思われる。児童生徒はこの二人について学び、島民自身が教育の分野においても切り拓いてきた歴史を身に付けている。

(2) 個々人に対応した学習支援と支え合いの学校風土

島内の小中学校は、へき地教育振興で丁寧な作文指導を取り入れた教育などで知られるが、これまでも子ども自身の生活と結びつけた省察が育まれてきた。島の中学校を卒業した男子は多くが漁師になって島に残るが、女子は出ていくのが昭和には一般的であり、医学的な指導があり、教育により近親での結婚を避ける意識もあったようである。他人を蹴落したり、疑ったりといったことも含めた競争意識不足、コミュニケーションや自己表現が不十分といったマイナス面もいわれることはあるが、個人学習の充実や相互学習の充実などきめ細かい教育で学力向上においても成果をあげたこともあった。そして、全員が顔見知りであり、放課後や校内での遊びの共有と共に支え合い学習が日常化されている。

(3) 直接体験と模倣による学習の蓄積

高校進学率は他の島しょに比べても昭和期には低かった。島しょであるため交通手段が難しく、高校に通うことが特に困難で、経済的に厳しいことと共に通うべき高校が修猷館高校と糸島高校しかなかったこと、寮などの生活施設が対象の高校にはなかったことにもよる。九州大学等調査結果では、高校進学率の低さは「漁師に教育は不要」といった島民の教育意識が大きいとも示されている。そうした中、児童生徒は自然に対応せざるを得ない厳しい仕事を見て、聞いて、まねて学んでいく。たいていの学びは直接体験であり、試行錯誤の繰り返しであり、学びが生活に跳ね返ってくる。

(4) 異年齢・異世代での交流学習

現在は、福岡市の配慮により、児童生徒の人数は少ないが複式学級は限られており、各

学年や個人に対応した学習支援が展開されている。そうした中でも異学年、そして小中学校の交流は日常化され、小中学校の教師も共に教えるという態勢がとられている。児童は年上から教えられ、年下に教えるということが自然にできていた。ただし、教師にも友だちのような言葉で接することもあり、大人に依存が強すぎるところが出る可能性が有るのではと思われる。子どもたちは素朴で人懐っこく、気軽に大人と話ができるのではと感じた。このことは、学校が地域の拠点となっているともみてとれ、訪問日にも地域の人たちがあじの開きの指導をしてくれるなど、学校と地域との交流があり、子どもと大人の距離の近さを感じられた。子ども同士は少ない人数でもあり、異学年で自然と助け合って活動をしていた。人間関係がわかりきり、固定化されやすいという課題もあるのではと思われるが、2005年の地震など危機の時にはこういった異年齢・異世代での出会い、触れ合い、学び合いが、年下の子を励まし、高齢者をリヤカーで運ぶなど現実対応での力となったといえよう。

(5) 防災教育の充実によるレジリエンス実践力強化

防災教育に関しては、福岡市からも2016年に表彰されるなどその充実は認められている。防災教育ないしはレジリエンス教育が体系的に学校カリキュラムの中に取り入れられている。特別活動や総合的な学習の時間だけではなく、国語科、社会科や理科とも連動させ、総合的に組み立てているという特徴があり、全国でも有数のものであろう。津波への備えの学習とともに、地域や通学路の探検、地理的学習もしており、実践的な内容となっている。また、子どもたち自身の地域の人への震災時の聞き取りを年間の防災学習に取り入れるなど、地域交流や震災体験の継承という視点からも先駆的に行われてきている。ただし、2017年度の校長によると、一昨年までの赴任までは本格的な学校教育としての防災教育ないしレジリエンス教育はほとんどなされていなかったという。

(6) 防災キャンプによる主体的定着

防災キャンプは本格的なものである。学校だけではなく、家庭に児童がいるときに地震が起こったという設定から始まる。家での災害が生じた時点から既に学習は始まっており、自分の安否を知らせる掲示板の活用実践、ダンボールによる居場所・寝床作り、保存米を自分たちで火を起こして炊き、夜も地域を回るなど、夜への対策への基本理解のための学習もなされている。また、日本赤十字社の先生による防災教室、応急処置、非常食体験も行われ、応用的現実的な内容も取り入れられている。島しょのため、物資補給等が困難であることも考えられ、こういった体験はいざの場合、必ず役立つものと考えられる。2017年度の校長は自分でキャンプ道具を持ち、活動するなど野外活動にも造詣が深く、防災キャンプも含め、創造的・積極的に取り組んでいる。この際の特徴は例えばお米を炊くための薪となるものを考えて児童同士が相談して探してくるなど児童が自分で考え、行動し、確実に役立つことが基本とされており、主体的対話的で深い学びへとつながるものとなっている。

4. 子ども自身のレジリエンスを中心に

復元力ともとらえられるレジリエンスは相互作用的なものではあるが、ここではコミュ

ニティレジリエンスだけではなく、主として子ども自身のレジリエンス、中でも獲得的要因としての問題解決志向、自己理解、他者心理理解との関係に留意しながら、学校教育における実践を文献や観察及び聞き取り内容からさらに詳細に試行的に考察する。

(1) 体系的防災学習とレジリエンス教育

獲得的要因としての問題解決志向は「生きる力」育成を目標として明確にされ、例えばお米を炊く場合も自分でまきとなるものを見つけたり、うまく炊けなかったりを試行錯誤させる内容を取り入れ、子ども自身の発見と実践力の育成を図っている。図6は小中一貫して作成された防災教育の全体計画である。



小学校1・2年生	小学校3・4年生	小学校5・6年生	中学校1・2・3年生
<ul style="list-style-type: none"> ・通学路や島に関心をもち島を愛する心を育てるとともに、災害時の避難の仕方を知り、安全な登下校ができるようにする。 ・地震や津波による怖さや危険について理解し、適切な避難の仕方を身につける ・災害時の対応について家族と話し合い、防災意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島の防災施設や設備、地域の地形等を理解し、災害時の避難の仕方を知り、安全な行動ができるようにする。 ・地震や津波が起こるわけを知り、それに伴う危険について考え、適切な避難の仕方を身につける。 ・防災対策の準備について考え、防災意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会における災害から身を守る工夫について知り、安全な行動の仕方ができるようにする。 ・地震速報や津波予報システムを知り、青少年を助けながら避難する仕方を身につける。 ・玄界西方沖地震について知り、現在の避難の仕方に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地震の震度やマグニチュード、津波の速度や破壊力等についてより詳しく調べ、安全な行動の仕方の理解を深める。 ・地震速報や津波予報システムを理解し、島民の避難を支援する仕方を身につける。 ・過去の玄界西方沖地震の体験談や工夫を調べ、防災意識を高める。

図6. A小・中学校一貫 防災教育(地震・津波) 全体計画

上図に示されているように蓄積されてきた防災教育及びレジリエンス教育を踏まえた上で体系的横断的な教育計画が練られている。小中学校は共に島に1校しか無く、島には高等学校は存在していない。このように小中学校で体系的に教師も共通理解した上で実施していくことが効果的である。このことは学校施設自体が、A島での震災後は一体化されており、より容易になされるようになってきている面もある。

児童・生徒の実態は震災後ではあるが、図6に示されているように避難場所や家族との連絡方法を決めていない子どもが多く、震災体験があっても意図的に防災やレジリエンスに対する教育を仕組んでいくことが大切であることがわかる。このことは、震災後赴任し、レジリエンス教育の最も中心的存在であり、現在他校に転出しているA教諭の「震災のあった学校なのに防災教育は不十分であった」という論者の聞き取り結果からもうかがわれる。

目標では明確にアクティブラーニングとも関連し、実践力の育成が「自ら判断し、危険を予知して最善の行動がとれる」とし、さらに「助け合い」を明示している。実際、2005年の震災直後、30年以上前から取り組まれている少年少女消防クラブ活動に学んだ体験により、動けない高齢者をリヤカーで運び、家庭のガスを消して回ったという実践力へとつながっている部分はある。めざす児童・生徒像では「自分で守れる、集団の安全に役立つなど」と「自助、互助、そして共助」が明示されている。家庭からの防災への要望は高いものの地域の防災教育への取り組みは不十分と記述されており、島の防災訓練も学校への聞き取りでは最初はどちらかという学校主導で発展させていったということである。

図6に示されている防災教育推進の視点として防災リテラシー、人間としての生き方、科学的理解の3点を挙げている。そこでは、生活科、社会科、保健体育科、特別活動、総合的な活動の時間など授業等の統合が図られている。学年ごとに合科的な内容が統合的な視点から計画され、実践されている。学年ごとの防災教育の視点が示され、発達段階に応じた防災教育の目標が行動の視点で提示されており、小学校中学年では「島の防災施設や設備、災害時の避難の仕方を知り、安全な行動ができるようにする」、小学校高学年では「玄界西方沖地震について知り、現在の避難の仕方に生かす」といったような島の実態に

即した具体的・現実的獲得内容が明示されている。学校カリキュラムの一部として位置づけられている子どもたちによる震災体験の聞き取りによって他者心理理解を深め、多面性・異文化性に気づいている。アクティブラーニングの活動を通じてレジリエンスへと通じる力量形成がなされている。自助的な内容から共助的な内容へと段階が進んでいるのがみとれる。家庭や地域とも連携・協働しながら、段階的に子どもの参画を進展させて着実に知識と共にレジリエンスと関連する心的な自信も育てているのである。このような合科的体系的な学校教育計画は本格的なレジリエンス教育には不可欠である。

また、外部からの支援体験学習と感謝の和太鼓体験学習はレジリエンスの向上に役立つと考えられる。被災直後から当時の首相である小泉首相、そして天皇陛下皇后陛下のご訪問、有名人の訪問や支援コンサートの実施など児童への多くの多様な支援・ボランティアが直接子どもとの関わりでみられた。また、大阪教育大学の学生は長期にわたり子どもたちと関わり続けた。ボランティアや音楽イベントなど外部からの支援を受けた体験は子どもたちに他者心理理解、特に人間への信頼を深めた。そのことが、子どもたちから感謝を態度で示したいという和太鼓体験学習、和太鼓の発表による感謝の表明体験により、何をすべきかどうすればよいかといった戦略的に課題に対応する力へとつながったのである。

(2) レジリエンス強化のための具体的事例の検討

以下は、レジリエンス教育の実践力強化として実際に行われた防災キャンプで A 小学校が作成したスケジュール表である。

- めあて ○ 本当に「ひなん」して来た気持ちで、キャンプに取り組もう。
- 何が必要で、どんなことができるか、考えながら行動しよう。
- お互いの気持ちを考えた行動がとれるようになろう。

時刻	7月30日(木)	7月31日(金)
6:00		起床
6:30		荷物整理、体育館へ移動
7:00		ラジオ体操(体育館)
8:00		朝食準備、朝食
9:30		日本赤十字社 緒方先生から
10:00		体育館または音楽室
11:30		防災教室・応急処置・非常食体験
12:00		閉会式 体育館
15:00	地震発生・学校へ避難	
16:00	開会式 体育館 テント設営 男子6年教室 女子5年教室	
17:00	段ボール等で、寝る場所をつくる	
18:00	夕食準備 持ってきた材料、食品での炊飯	
19:00	体育館横 宿直室前	
20:00	夕食	
21:00	片付け 調査報告会 6年教室	
22:00	ナイトハイク(希望者) 音楽室 自由時間・就寝準備 就寝	

図7. 2015年度第3回 A小防災キャンプ スケジュール

○ 調査報告会

総合的な学習の時間に、自分が調べたことについて、つくったチラシを見せながら全員に報告してください。

○ ナイトハイクは、かいちゅう電灯を使って、暗い通路を歩く練習です。一人ずつ決められたコースを一人で歩いてください。希望者だけです。

以上のスケジュールや実際に論者が参与観察した内容・方法を考察する。まず目当ての最初の「本当にひなんして来た気持ちで、キャンプに取り組もう」は集中して、自分のこととして取り組もうという基本的なあり方の確認であり、主体的な学習の基本である。次に示されている「何が必要で、どんなことができるか、考えながら行動しよう」というのは、東日本大震災の際に「釜石の奇跡」といわれた「てんでんこ」という自分で考え行動する規範と重なる。3つめの「お互いの気持ちを考えた行動がとれるようになろう」はアクティブラーニングの基本理念である対話的という目標であり、A小学校の場合は支え合う実践力へと向かっている現実的な目的といえる。現実的にダンボールでの泊まり込みのキャンプを行う中で、それぞれ子ども同士の異質性を理解し、生かしながらレジリエンスを高めていた。

防災学習においては、子どもは大人と協働で行う中で、自分自身の力の限界を知り、自己理解を深めているが、ここでは自己理解という観点から考察する。継続して体系的に実施し、危機管理意識も含め、学校全体で実施するには校長・職員の子どもの理解に関する共通理解が不可欠である。避難訓練や総合的な学習の時間だけでなく、すべての教科等に関わる総合的カリキュラムの充実・実践が有効であり、一人一人の児童・生徒自身の自己理解が基礎としてなされている。

防災キャンプなど島民の自己決定的活動による地域全体に関わる共通体験の創造が重要で、防災だけでなく、合同運動会、神社再興のための協働活動などが絆づくりとなった。防災キャンプの協働など保護者と地域とのつながりも深く、子どもを通じて地域への働きかけがあり、地域も防災活動で活性化しているところもある。防災キャンプ、震災の日である毎年3/20の防災訓練によるコミュニティ活動・絆づくりが進められているが、防災学習においてはリーダーの意欲と力量、コーディネート力が必要である。子どもの活動が大人に勇気を与え、コミュニティ形成のきっかけとなっているが、子どもは自己理解力を向上させる中で役割と責任を自覚し、実践力の向上を図っている。

子どもたちからの島民への震災体験等の聞き取りによる記録化によりコミュニティの気づきも生じている。専門家やボランティアの活動を見、協働することで、教育分野だけでなく福祉も含めて島全体での多様な共同体験へとつながっていくことが大切であり、そのことが子どもの自己理解を深める。社会科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動などと関連している子どもたちによる震災体験の聞き取りによって子どもも大人も他者心理理解を深め、コミュニティを基盤とした中で子どもとおとな相互に多面性・異文化性に自然と気づきを深めている。防災キャンプなど島民の自己決定的活動による地域全体に関わる共通体験の創造が重要で、防災だけでなく、合同運動会、神社再興のための協働活動などが絆づくりとなった。防災キャンプの協働など保護者と地域とのつながりも深く、子どもを

通じて地域への働きかけがあり、地域も防災で活性化しているところもあり、地域へのレジリエンス教育となっている。

ただし、震災直後は防災やレジリエンスに、それほど熱心に取り組んでいなかったと学校関係者は述べている。A先生というリーダー的な先生によって児童の防災学習は進展した。中でも、防災キャンプは本格的なものである。家庭や地域とも連携し、地震が起こったという子どもの家庭にいる時点から既に学習は、始まっており、自分の安否を知らせる掲示板の活用実践、ダンボールによる居場所・寝床作り、保存米を自分たちで火を起こして炊くなどもある。夜も地域を回るなど、夜への対策への基本理解のための学習もなされている。また、日本赤十字社の先生による防災教室、応急処置、非常食体験も行われ、現実的な内容も取り入れられている。島しょのため、物資補給等が困難であることも考えられ、こういった体験はいざの場合、必ず役立つものと考えられる。今の校長は自分でキャンプ道具を持ち、活動するなど野外活動にも造詣が深く、防災キャンプも含め、創造的・積極的に取り組んでいる。

その下地を作ったのは以前A小学校に勤務していたA先生である。校長の「ここで防災教育やらんと」という言葉に後押しされたというが、当初はまわりの先生の理解もそれほどではなかった。千葉大学の鈴木敏恵先生のプロジェクト学習を参考にしながら、簡易トイレや食料など工夫しながら総合的なレジリエンスの力を児童につけるために開発したという。福岡市西区全体をまるごと博物館に見立てて展示や活動を行う「西区まるごと博物館」では児童生徒を参画させ、島全体の活動とも連動させながら、島外へ発信しながら、島おこしも含んだ形で展開された。今後はさらに加えてカリキュラムの中に風水害や高齢者対応が求められる。報告会というシェアリングも行われ、情報共有とともに児童生徒の省察が行われている。

4. BGFC (少年・少女消防クラブ)

最後に、レジリエンス教育でA小学校、特にA中学校で重要で実践的力量形成を發揮したのが消防クラブである。1971(昭和49)年、A中学校で少年消防クラブが結成された。島民の男性は日常的に昼夜を問わず、漁師として出ることもあり、女性消防団も活躍するが中学生防災組織が島では不可欠である。BGFC(少年・少女消防クラブ)は少年期から着実に防災意識やコミュニティ意識を育む貴重な機会として、継続的に取り組まれている。このことは、歴史的に島においては子どもの時から役割を担うという伝統から自然に生じた部分もあろう。しかし、意図的に創られたクラブには島の子どもは全員参加で、着実にすべての島民が島の危機に立ち向かうということが継続して訓練されることでコミュニティレジリエンスにつながってきている。

震災直後の中学生の熱心で落ち着いた行動は被災前の本格的な体験学習によるものであり、高齢者を中学生が高所にリヤカーで運んだり、島内の家々のガス栓を閉めたりと震災時の効果的な活動が社会で評価される(「毎日中学生新聞」2015年7月5日)ことにより、問題解決志向と自尊感情の向上にもつながる自己理解を中学生自身は深めることができた。少年少女消防クラブ活動は学校教育の中で正式に総合的な学習の時間に位置づけられ、市

や消防署、防災協会、日本赤十字社等と連携して行われてきている。それぞれの立場の異なる大人と接することにより、他者心理理解へとつながっているだけではなく、異質な他者との協働実践へとつながっている。少年少女消防クラブの活動は小学生段階でのレジリエンス教育の蓄積の上でコミュニティレジリエンスとつながる地域での多層的な関係づくりとして行われているといえよう。下記の図にみられるような防災マップ作成などが継続して行われてきており、子ども自身が社会を考える行動を取り入れることで、防災を常に考え、被災体験を踏まえたことで被災後の事態を現実的に想像できるようになっている。このことは、被災時だけではなく、火災や自然災害にも同様の対応力が求められ、応用的な学習がレジリエンスを高めているといえる。

レジリエンス教育だけではなく、様々な授業で現実的に即した体験学習のためのワークシートを使うなど、子どもたち自身が考える活動の取り入れがレジリエンスの高いコミュニティづくりにもつながり、常に防災を考え、災害後の事態を現実的に想像でき、子どもだけではなく関係する大人の地域意識にも影響を与えている。



図 少年少女消防クラブの作成した防災マップ（2003年作成）

少年少女消防クラブ活動は社会に開かれたものとして総合的カリキュラムの一環として実施されている。子どもたちの獲得的要素としての問題解決志向は「生きる力」の育成を目標として明確にされ、例えば地域の人たちとかかわりながら、お米を炊く場合も自分で火元（まき）となるものを見つけたり、うまく炊けなかったりを試行錯誤させる内容を取り入れ、子ども自身の発見と実践力の育成を地域の人々の見守りの中で図っている。少年少女消防クラブは女性消防団とも連動し、危機管理の面だけではなく人のつながりの面でもコミュニティレジリエンスを支える重要事項となっているが、今後も防災学習等のさらなる充実とコミュニティ活動としての位置づけが求められよう。

おわりに

最後に、A小中学校におけるレジリエンス教育に関して総合的な考察として3点提示する。

(1) 島におけるコミュニティレジリエンスの継続的醸成と学校教育との関連づけ

これまでも経済的に苦しい時に島で強制的に生活改善を行うなど、過去、島全体で種々

困難な状況に立ち向かってきた貴重な歴史がある。異年齢・異世代の交流が自然と育まれており、児童生徒も自然に交流から学び、学校教育においても異年齢・異世代の出会い、触れ合い、学び合いを重視し続けている。お互い様、おかげさまの意識はあると思われる。その際、島しょの特徴の一つであろうが、島民はほとんど、個々の島民全員・家を知っており、住民相互での支え合いの風土を基本として、結束力は比較的強く、年長者の権威、男性の優位性などにより迅速な対応が、可能となっているのではと考えられる。しかしながら、個々人の生きがいやゆとりはさらに拡充することが求められる。今後、生涯学習の観点から、各年齢段階、各世代への様々な学習や文化活動などへの支援が求められる。就学前、小中一貫、中卒後、青年期、成人、高齢期の体系性が必要とされよう。短・中・長期の島づくり計画を児童生徒も含めた住民参画で情報共有しながら作成していく必要があり、毎年の検証、見直しが、よりよい改善のためにある程度はなされているが、さらに確認を繰り返し、防災や復興に関しても意図的体系的により一層の啓発・教育が求められる。別の視点で見ると島であり、島民であるため、逃げられないこと、強制的であること、あきらめという面が無いとはいえない。時代の変化や多様性を認め合う人権の視点からは検討が必要となるかもしれない。もう一步、挑戦、地域貢献を自ら行うまでにはっていないともいえるが、児童生徒にとって島全体での様々な活動やコミュニティレジリエンスは児童生徒のレジリエンス教育の基盤となっているといえる。児童生徒のレジリエンス教育のためコミュニティレジリエンスの醸成とコミュニティレジリエンスと関連づけた教育が必要である。今後も島の独自性を踏まえた上での地域全体のレジリエンスを視野においた学校でのレジリエンス教育が不可欠である。

(1) パートナーシップの視点からの協働したレジリエンス教育

学校教育においては、島しょということもあり、島の独自性にこだわり続けてきた。漁法を学んだり他地域との交流を行いながら、島では島中心の考えをもとに技術等を取り入れながら島民が協力しながら発展してきた。島に愛着を感じ、島にこだわるという考えはほとんどの島民の心にもあるようで、そのことが帰島を早め、全体で進んでいくという事につながったのではと思われる。しかし、学校教育におけるレジリエンス教育では、さらに多面的視点や先進性の取り入れが、必要ではとも考えられる。教育、健康・医療、福祉・労働等を視野に入れた上での総合的取組が求められる。相乗効果を出すように、例えばいのししの被害が甚大であるが、逆手にとって、いのししを加工し、いのししの販売、海産物加工品の開発など聞き取りの結果からの内容への取組も今後は必要ではと思われる。学校カリキュラムでは現実に即し、実際上の効果を考慮に入れた上でのネットワーキングが求められる。児童生徒のレジリエンス教育の実質化のためには学校・家庭・地域のさらなる連携・協働は不可欠である。子どものための補助・支援はある程度行われているが、島の本質を考えていくという視点から学校・教師と島民との対話の進展・協働が必要である。また、島独自の教育計画を立てる場合でも部外者からの指摘、客観的事実の取り入れのためネットワーキングが必要ではと思われる。子どもへの支援・補助でなく、コミュニティスクールや地域づくりの視点から、防災教育だけではなく、地域づくりの視点からもさら

なるレジリエンス教育充実のために連携・協働していくことが重要であろう。比較的若いPTAの島づくりへの参画を段階に図っていくことも求められるのではと思われる。島民の主体的交流が図れるような公民館等の公共施設での魅力あるさらなる事業開発、あるいは新たな交流拠点づくりが必要で、そこで、コーディネーター等の人材育成も図られることが重要となろう。

(2) アクティブラーニングとのすりあわせ

児童生徒一人一人への丁寧な個別指導など従来の伝統の継続も視野に入れながら、今回の復興では、島民の話し合いや抽選の取り入れなど、子どもも含めたすべての島民の本格的な参画の方向性が、認められる。レジリエンス教育においては決定権の検討も含め、さらなるいろいろな年代からのプロセス参加の進展が求められる。なぜなら、レジリエンスには主体性、対話性が不可欠であり、主体性、対話性の向上には直接体験学習を含めたアクティブラーニングが最適な方法の一つであるからである。特に教師に対するレジリエンス教育の着実な共通理解、本格的な学習、研究、研修が主体性をいかした上で展開されることが必要であろう。観光は重要な産業振興であるが、島の発展のために無理に観光客を増やす必要はなく、基本は島民の健康・福祉であり、島民や児童生徒自身の「生きる力」が最大の課題である。被災後は支援が様々な形でみられ、補助金の活用は重要ではあるが、客観性や科学性を出来るだけ取り入れ、維持管理も含め、目的を何度も児童生徒が確認し、情報を共有しながら、主体的に挑戦していくことが求められる。児童生徒ができるだけ発達段階や体験の度合いに応じて参画し、島に愛着を持ち続け、自然や環境の良さを活用し、震災からの学びをいかした安心・安全、そして健康や生きがいを実感できる自己管理的な生活・地域が求められている。今後のレジリエンス教育ではアクティブラーニングの視点から学校教育においても豊かな芸術文化活動、生涯学習活動によって危機や高いストレスの時に実際に行動できる本物のレジリエンスが醸成されることが期待される。

注、引用、参考文献

- 1) 福岡市：玄界島震災復興記録誌。260p., 福岡市, 2008.
- 2) 高橋和雄：玄海島の震災復興に学ぶ——2005年福岡県西方沖地震、古今書院、2016.
- 3) 前田昌弘：津波被災と再定住—コミュニティのレジリエンスを支える。pp.7-12, 京都, 京都大学出版会, 2016.
- 4) 齊藤和貴・岡安孝弘：最近のレジリエンス研究の動向と課題, 明治大学心理社会学研究, 2009.
- 5) 清水美香：レジリエンスと災害マネジメント及び公共政策の関連性、国際公共政策研究、大阪大学、2012.
- 6) 村木良孝：レジリエンスの統合的理解に向けて——概念的定義と保護因子に着目して——、東京大学教育学研究科紀要, 2015.
- 7) 林春男：災害レジリエンスと防災科学技術、京都大学防災研究所年報、2016.
- 8) 原美香：学校教育におけるレジリエンス育成 立教大学教職課程 教職研究第23号、2013.
- 9) 吉田克己編：玄界島一離島調査第十部一。p.19, 福岡, 福岡県立戸畑高等学校郷土部, 1967.
- 10) 貝原益軒編, 竹田定直校訂：筑前国続風土記 卷二十三 志摩郡。pp.32-33, 1709.
<https://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/gallery/H25/fudoki.html>.
- 11) 玄界小・中学校福岡県西方沖地震災害復旧校舎等落成式典・祝賀会実行委員会：玄界魂 玄界小・中学校福岡県西方沖地震災害復旧校舎等落成記念誌, pp.40-47, 福岡, 2009.

- 12) 前掲4). pp.40-41.
- 13) 前掲4). p.42.
- 14) 前掲4). p.11.
- 15) 福岡県玄界小学校百周年記念誌編集委員会：玄界小学校創立百周年記念誌. pp.119-130, 福岡, 福岡市立玄界小学校百周年記念事業実行委員会, 1987.
- 16) 前掲15を参照
- 17) 玄界島公式サイト
- 18) 久保勝利・西岡伸紀・鬼頭英明:高校生における自律的動機づけとレジリエンスとの関連——自己決定理論の遠洋の可能性——, 兵庫教育大学学校教育学研究. 2015. 第27巻. pp31-39.
- 19) 池田誠喜・芝山明義・後藤正彦:レジリエンスと関連する心理的概念の特徴と学校教育への適用. 鳴門教育大学研究紀要. 第33巻. 2018.